

(6月29日)「創世記45:1~8」

しかし、今は、わたしをここへ売ったことを悔やんだり、責め合ったりする必要はありません。命を救うために、神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのです。  
(創世記45章5節)

・ヨセフはユダの嘆願を聞き、自分を抑えきれなくなりました。そして自分の周りにいた人(執事たち)を外に出し、ついに兄弟たちに身を明かします。突然声を上げて泣き出したヨセフを、兄弟たちはどのような目で見たのでしょうか。

・ヨセフは自分の名を告げた後、「お父さんはまだ生きておられますか」と問います。エジプトの責任者として社交辞令のように聞いた前回の問いとは違い、今回は家族として親身に尋ねています。

・そしてヨセフは、すべてのことは神さまのご計画であると断言します。夢によって兄たちに疎まれ、エジプトに売られたこと。夢によってファラオに取り立てられ、エジプトの責任者となったこと。そして今、ついにヨセフと兄弟は再開したのです。

(6月30日)「創世記45:9~15」

さあ、お兄さんたちも、弟のベニヤミンも、自分の目で見てください。ほかならぬわたしがあなたたちに言っているのです。  
(創世記45章12節)

・ヨセフはすべての出来事が、神さまの導きによるものだと感じました。もし自分がエジプトに売られていなかったら、7年間の飢饉に耐えることはできなかったでしょう。エジプトもそうです。ヨセフの夢の解き明かしがなければ、穀物を貯えることもなかったでしょう。

・すべてのことが神さまのみ心だという確信を得て、ヨセフは家族をゴシェンという下エジプトの一地方に招くことを提案します。あと飢饉は5年続きます。その期間困らないために、家族みんなで来たらいいと招くのです。

・兄弟たちはヨセフに合えたこと、そして苦しい生活から抜け出せそうだということが、その二つの喜びを同時に得ました。つい先ほどまでベニヤミンが奴隷になるかどうかの窮地だったのですが、あっという間に喜びへと変わっていったのです。

## 創世記・出エジプト記 通読

6月



(6月 1日)「創世記 38 : 1~11」

彼のしたことは主の意に反することであったので、彼もまた殺された。

(創世記 38 章 10 節)

・ヨセフがエジプトに連れて行かれた後、38 章にはまったく別の物語が入ります。ヤコブとレアの間に生まれた 4 番目の息子、ユダのお話です。ただし 39 節以降の物語とは、時間的なつながりがおかしくなっています。この物語は後から挿入されたのでしょう。

・ユダの長男エルは妻タマルを迎えましたが、彼は主の目に悪とされたので、子どもを設けないうまま主によって殺されてしまいました。なぜ殺されたのかということはさておき、このような場合、子孫を残すために弟オナンが兄嫁をめとる必要がありました。(レビラート婚)

・その場合子どもが生まれても、財産は弟ではなく生まれた子どものものとなります。そのためオナンは子孫を残さないようにし、結果、主に殺されてしまいます。ユダには三番目の息子シェラがいましたが、成人していないという理由でタマルをめとらせませんでした。

(6月 2日)「創世記 38 : 12~19」

タマルはやもめの着物を脱ぎ、ベールをかぶって身なりを変え、ティムナへ行く途中のエナイムの入り口に座った。シェラが成人したのに、自分がその妻にしてもらえない、と分かったからである。

(創世記 38 章 14 節)

・夫に先立たれた人のことを、聖書では「やもめ」と呼びます。特に跡継ぎがないやもめの場合、その立場は大変弱く、人の助けがなければ生きるのがとても困難だったようです。

・妻を亡くしたユダは、三男シェラが成人しても、兄嫁であるタマルをめとらせようとはしませんでした。このままでは子孫を残すことができないと悟ったタマルは、驚くべき行動に出ます。

・ユダはタマルを遊女だと思い込み、声を掛けます。ユダはタマルに渡す山羊の保証として、印章と杖を預けます。そしてユダはタマルのところに入り、タマルは身ごもります。まったくタマルに気が付かないユダ。とても不思議な気がします。

(6月 27日)「創世記 44 : 11~17」

執事が年上の者から念入りに調べ始め、いちばん最後に年下の者になったとき、ベニヤミンの袋の中から杯が見つかった。

(創世記 44 章 12 節)

・兄弟たちは、それぞれ自分の袋を開けました。ヨセフの家の管理者が年上から順に中を確認していったとき、ベニヤミンはどのような心境だったでしょう。袋を開けた瞬間、あつてはならないものを見つけてしまったのです。

・兄弟たちは、杯を盗んだものは死罪に、他の者は奴隷になりますと言っていました。しかし家の管理者は、杯を盗んだものだけが奴隷になり、他の者は父の元に帰っていいと言います。そして杯が見つかったとき、兄弟たちは「全員が奴隷になる」と言い換えました。

・もしベニヤミン以外の袋から杯が見つかったのなら、兄弟たちはその一人を残して父の元に戻っていたかもしれませぬ。「ベニヤミンを父の元に戻すこと」が彼らにとって、最重要課題だったからです。

(6月 28日)「創世記 44 : 18~34」

ユダはヨセフの前に進み出て言った。「ああ、御主君様。何とぞお怒りにならず、僕の申し上げますことに耳を傾けてください。あなたはファラオに等しいお方でいらっしゃいますから。

(創世記 44 章 18 節)

・「杯を盗んだベニヤミンを残して、他の者は父の元に帰るがよい」、そう言われても兄弟たちは帰ろうとはしませんでした。そして兄弟の一人、ユダがヨセフに対して嘆願します。ユダはエジプトにベニヤミンを連れてくる際、ヤコブに約束をした人でした。

・ユダはヤコブとレアの 4 番目の子どもでした。彼はヨセフにこのように願います。自分をベニヤミンの代わりに奴隷にして欲しい。そしてベニヤミンを父ヤコブの元に戻して欲しいと。

・昔、兄たちに売り飛ばされたヨセフ。けれども今、ユダの口から、自分を犠牲にしているから弟を救って欲しいという願いが聞かれます。ヨセフはこの言葉を、どのように受け止めたのでしょうか。

(6月 25日)「創世記 43 : 26~34」

兄弟たちは、いちばん上の兄から末の弟まで、ヨセフに向かって年齢順に座らされたので、驚いて互いに顔を見合わせた。(創世記 43 章 33 節)

- ・帰宅したヨセフは、兄弟たちの前に立ちました。そして父の安否を尋ね、ベニヤミンと再会したところで、彼はたまたま席を外しました。そして彼は胸がいっぱいになり、隣の部屋で泣きました。
- ・なぜこのときに、ヨセフは自分の身を明かさなかったのでしょうか。兄弟たちに自分と同じような苦しみを、少しでも多く経験させたいと思ったのでしょうか。しかしヨセフは食事の席で、兄弟たちに自分の身許がわかるようなヒントを与えます。
- ・一つは、兄弟たちを年齢順に座らせるということです。11人もいるわけですから、その並び方は 399 万通り以上(多分)あります。偶然ではありえないことをしているヨセフを、兄弟たちはもう少し丁寧に観察したらよかったです。

(6月 26日)「創世記 44 : 1~10」

僕どもの中のだれからでも杯が見つければ、その者は死罪に、ほかのわたしどもも皆、御主人様の奴隷になります。

(創世記 44 章 9 節)

- ・昼の食事をヨセフと共にした兄弟たちは、そのまま一泊したようです。かなり長時間の宴席で、兄弟たちはエジプトの責任者に気に入られたのだと思っただけかもしれません。ところがヨセフは、さらに罌を仕掛けます。
- ・ヨセフは執事に兄弟たちの穀物の袋に銀を戻し、さらにベニヤミンの袋には銀の杯を入れるように指示します。なぜこのような手の込んだことをするのでしょうか。それは後ほどわかっていきます。
- ・ヨセフは執事に命じて、兄弟たちを追いかけます。そして兄弟たちに、銀の杯が無くなったことを告げます。当然兄弟たちには、心当たりはありません。しかし前回穀物を購入したときに袋に銀が戻されていたことを考えると、出発前に袋を調べるべきだったでしょう。

(6月 3日)「創世記 38 : 20~26」

ユダは調べて言った。「わたしよりも彼女の方が正しい。わたしが彼女を息子のシェラに与えなかったからだ。」ユダは、再びタマルを知ることはなかった。(創世記 38 章 26 節)

- ・ユダは「代金」である子山羊をタマルに送ろうとします。保証の品として渡した、印章と杖を取り戻したかったということもあるでしょう。しかしユダがタマルと出会った場所には、そもそも神殿娼婦などいなかったそうです。
- ・そんな時、タマルが身ごもったという知らせが、しゅうとであるユダの耳に入りました。売春は大罪です。男性の買春も変わらないとは思いますが、当時は女性しか罪に問われなかったようです。
- ・タマルはユダの元に人を送って、彼の持ち物である印章と杖を確かめさせます。ここでユダは、自分が遊女だと思って入った女性がタマルであることを知るので。タマルには子孫が出来たので、もうシェラを与える必要はなくなりました。

(6月 4日)「創世記 38 : 27~30」

ところがその子は手を引っ込めてしまい、もう一人の方が出てきたので、助産婦は言った。「なんとまあ、この子は人を出し抜いたりして。」そこで、この子はペレツ(出し抜き)と名付けられた。

(創世記 38 章 29 節)

- ・タマルとペレツとゼラの名前は、マタイによる福音書 1 章にも出てきます。イエス様の系図の中に、彼らの名は入っているのです。タマルは系図の中に書かれた四人の女性のうちの一人でした。
- ・タマルは遊女の恰好をし、義父であるユダの子を身ごもりました。倫理的には間違ったことかもしれません。しかし彼女の「子孫を残す」という強い決意が、結果的にイエス様の系図に結び付いたのです。
- ・神さまはそのような人をも用いてくださることを、覚えていきたいと思えます。イエス様は聖人君子の中に生まれたのではなく、わたしたち人間の様々な罪を抱えてお生まれになったのです。

(6月 5日)「創世記 39 : 1~6」

主がヨセフと共におられたので、彼はうまく事を運んだ。彼はエジプト人の主人の家にいた。

(創世記 39 章 2 節)

- ・ヨセフの物語に戻ります。エジプトに連れて来られたヨセフは、ファラオ（古代エジプトの王）の役人であり、侍従長（新しい聖書では「親衛隊長」）のポティファルの元に連れて来られました。
- ・ポティファルはヨセフを買い取ります。奴隷の売買は普通におこなわれていました。戦争によって奴隷になる人もいれば、借金のカタに奴隷になる人、また職業奴隷という人もいたそうです。
- ・神さまはヨセフを祝福され、ポティファルの財産は豊かになっていきました。そのためポティファルは、すべてのものの管理をヨセフに任せていきます。しかし「好事魔多し」、ヨセフの身に危機が迫ります。

(6月 6日)「創世記 39 : 7~10」

彼女は毎日ヨセフに言い寄ったが、ヨセフは耳を貸さず、彼女の傍らに寝ることも、共にいることもしなかった。

(創世記 39 章 10 節)

- ・「ヨセフ・アンド・ザ・アメージング・テクニカラー・ドリームコート」というミュージカルをご存じでしょうか。アンドリュー・ロイド・ウェバーとティム・ライスのコンビによるもので、DVD も発売されています。
- ・そこに登場するポティファルの妻の、まあ妖艶なこと。若くて財産の管理を任されているヨセフを口説こうと、彼女は「わたしの床に入りなさい（新しい聖書では『私と寝なさい』）」と声を掛けます。
- ・しかしヨセフにとって、主人の妻と共に寝ることは「神に対する罪」でした。また主人ポティファルを裏切ることにもなります。いくら主人の妻がその地位を利用して強要しても、ダメなものはダメだときっぱり断ることが大事なのです。

(6月 23日)「創世記 43 : 8~14」

どうか、全能の神がその人の前でお前たちに憐れみを施し、もう一人の兄弟と、このベニヤミンを返してくださいますように。このわたしがどうしても子供を失わねばならないのなら、失ってもよい。(創世記 43 章 14 節)

- ・ユダはイスラエル（ヤコブ）に対し、もしベニヤミンが戻ってこられなかったならば、自分がその罪を負い続けると誓いました。その熱い思いに押されたのか、イスラエルは息子たちがベニヤミンを連れてエジプトに行くことをようやく承諾します。
- ・彼は地域の特産品に加え、穀物の購入代金の倍の銀を持たせます。前回支払ったはずの銀が、袋の中に返っていたからです。
- ・イスラエルは最後に祈ります。そこには二人の息子を返して欲しいという願いと共に、「子どもを失わなければならないなら失ってもよい」という祈りも加えられています。「神さまのみ心を受け入れます」ということなのでしょう。

(6月 24日)「創世記 43 : 15~25」

彼らは贈り物を調べて、昼にヨセフが帰宅するのを待った。一緒に食事をすることになっていると聞いたからである。(創世記 43 章 25 節)

- ・エジプトについた兄弟たちを、ヨセフは自分の屋敷に招きます。ヨセフは執事に昼の食事の用意をするように伝えますが、兄弟たちは最初そのことを知りません。前回の訪問のときの恐ろしい記憶が、彼らの脳裏にフラッシュバックしたかもしれません。
- ・彼らは執事に、自分たちが困惑していることを伝えます。それは前回支払ったはずの銀が、いつの間にか戻されていたことです。彼らは自分たちが代金を支払わずに穀物を持ち帰ったと疑われているのではないかと、そう思っていたでしょう。
- ・しかし執事は「心配いりません」と優しく伝え、一同をヨセフの屋敷に入れ、水を与えて足を洗わせ、ろばにも餌を与えました。このような優しさが、一番不気味だと感じるのはわたしだけでしょうか。

(6月 21日)「創世記 42 : 29~38」

それから、彼らが袋を開けてみると、めいめいの袋の中にもそれぞれ自分の銀の包みが入っていた。彼らも父も、銀の包みを見て恐ろしくなった。

(創世記 42 章 35 節)

- ・シメオンをエジプトに残し、9人の兄弟は父ヤコブの元に帰ります。シメオンは次男でしたが、長男ルベンを置いて行くわけにはいかなかったのでしょう。ルベンはそもそも、ヨセフの殺害には反対していました。
- ・彼らは自分たちの身に起こったことを、ヤコブに報告します。回し者だと疑われたこと。一番下の弟ベニヤミンを連れてくるように言われたこと。戻ってくるまでシメオンが捕らえられたこと。そして彼らのそれぞれの袋には、自分の銀の包みが戻されていました。
- ・彼らは、とても気味悪がりしました。しかしエジプトに残してきたシメオンが心配です。兄弟たちはベニヤミンを連れて、もう一度エジプトに行かせて欲しいとヤコブに願います。しかしヤコブは拒みます。シメオンがかわいそうです。

(6月 22日)「創世記 43 : 1~7」

しかし、一緒に行かせてくださらないのなら、行くわけにはいきません。『弟と一緒にないかぎり、わたしの顔を見ることは許さぬ』と、あの人が我々に言ったのですから。」

(創世記 43 章 5 節)

- ・カナンの地に住むイスラエル(ヤコブ)と息子たちは、エジプトで買った穀物を食べつくしてしまいました。飢饉は7年間続くのですが、彼らはその事実を知らなかったのでしょう。(後の箇所から、この頃は飢饉の2年目だということがわかります。)
- ・父は「もう一度エジプトに行き、穀物を買うように」と息子たちに命じます。しかしそのためには、ベニヤミンをエジプトまで一緒に連れて行く必要があることを、息子たちは父に伝えます。
- ・なぜベニヤミンのことをエジプトの責任者が知っているのかというと、その責任者が根掘り葉掘り聞いたからです。「父は生きているか」、「他に弟はいるのか」。この質問を聞いたときに、エジプトの責任者がヨセフであることに気づくことはできなかったのでしょうか。

(6月 7日)「創世記 39 : 11~20」

そして、主人に同じことを語った。「あなたがわたしたちの所に連れて来た、あのヘブライ人の奴隷はわたしの所に来て、いたずらをしようとしたのです。」

(創世記 39 章 17 節)

- ・侍従長(親衛隊長)の妻ともなれば、欲しいものは何でも手に入ったのでしょう。また自分が言ったことに対して歯向かう人など、いなかったのだと思います。しかしヨセフは、何度もポティファルの妻の求めを拒否します。
- ・彼女は面目を潰されました。そしてヨセフを罨にかけて、貶めようとしませんでした。彼女はヨセフを誘ったときに彼の着物を掴み、話しませんでした。彼女の部屋から逃げるヨセフは、着物を取られてしまいました。
- ・「襲われそうになった」と訴える妻の言うことを、ポティファルは鵜呑みにします。もしかするとこのようなことは、今回が初めてではなかったかもしれません。ポティファルはヨセフを監獄に入れる決断を下します。

(6月 8日)「創世記 39 : 21~23」

監守長は、ヨセフの手にゆだねたことには、一切目を配らなくてもよかった。主がヨセフと共におられ、ヨセフがすることを主がうまく計らわれたからである。

(創世記 39 章 23 節)

- ・ポティファルの妻の企みによって、ヨセフは監獄(牢獄)に入れられます。まったくの冤罪ですが、侍従長の妻の訴えです。裁判などが開かれることなく、ヨセフは囚人と同じ扱いを受けます。
- ・しかし神さまはヨセフと共におられました。そのためヨセフがなすことは看守長の目に適い、ヨセフは監獄の中を取り仕切るようになります。自由に他の囚人とも会話が出来た立場になったのでしょうか。
- ・その結果、40章以降(明日以降)の物語が可能になっていきます。つまりヨセフは神さまの大きな計画の中で、監獄に入れられたと考えてもよいでしょう。神さまはこのように、わたしたちにはすぐに理解できない導きを与えられることがあるのです。

(6月 9日)「創世記 40 : 1~11」

「我々は夢を見たのだが、それを解き明かしてくれる人がいない」と二人は答えた。ヨセフは、「解き明かしは神がなさることではありませんか。どうかわたしに話してみてください」と言った。(創世記 40 章 8 節)

- ・ヨセフが入られている監獄に、二人の人が入ってきました。エジプト王の給仕役の長(新しい聖書では「献酌官長」と料理役の長です。彼らはエジプト王ファラオに対し、過ちを犯したそうです。その過ちの詳しい内容は書かれていません。
- ・ただ王に対して怒りを買ってしまったわけですから、二人は震えながら毎日を過ごしていたことでしょうか。そんなある日、二人は夢を見ました。聖書には夢を通して神さまがメッセージを与える場面が出てきます。今回もその一つです。
- ・ヨセフは夢を見て顔色を悪くしている二人を見て、話を聞くことにしました。「説き明かしは神によること」であるとはっきり伝え、ヨセフはその夢の内容を聞いていきます。

(6月 10日)「創世記 40 : 12~15」

ついては、あなたがそのように幸せになられたときには、どうかわたしのことを思い出してください。わたしのためにファラオにわたしの身の上を話し、この家から出られるように取り計らってください。(創世記 40 章 14 節)

- ・最初に夢の内容を語ったのは、給仕役の長でした。ヨセフの説き明かしによると、彼の夢は良いことの知らせでした。彼は以前と同じ職に戻れるというものです。
- ・ヨセフは給仕役の長に対し、説き明かし通りに元の職に戻ることができたら、自分のことをファラオに伝えて欲しいと頼みます。自分は無実の罪で牢に入れられていることを、ヨセフは力説します。
- ・このやり取りを、もう一人の囚人である料理役の長はどのような思いで見ているのでしょうか。自分もよい知らせが与えられるのではという希望を持ったのではないかと思います。しかし結果は…明日に続く。

(6月 19日)「創世記 42 : 6~16」

ヨセフは、そのとき、かつて兄たちについて見た夢を思い起こした。ヨセフは彼らに言った。「お前たちは回し者だ。この国の手薄な所を探りに来たにちがない。」(創世記 42 章 9 節)

- ・ヨセフはファラオに命じられ、エジプト全土を治めていました。穀物の管理もしていたようです。そこに自分の兄たちがそろってやって来ます。ヨセフはどのような気持ちで、兄たちを見ていたのでしょうか。
- ・昔自分が見た夢の通りに彼らがひれ伏すのを見て、心の中で笑っていたのでしょうか。なつかしさのあまり、涙が出そうだったのでしょうか。それともエジプトに売られたことを思い出して、怒りに震えていたのでしょうか。
- ・今日の箇所を読む限り、ヨセフは怒っていたように感じます。兄たちに「回し者」という疑いを掛け、弟のベニヤミンを連れてくるように強く求めます。兄たちはうろたえました。しかしそれがヨセフであることに、誰一人気がつきませんでした。

(6月 20日)「創世記 42 : 17~28」

ほかの兄弟たちに言った。「戻されているぞ、わたしの銀が。ほら、わたしの袋の中に。」みんなの者は驚き、互いに震えながら言った。「これは一体、どういうことだ。神が我々になさったことは。」(創世記 42 章 28 節)

- ・ヨセフは兄たちを、三日間牢獄に入れました。ヨセフが牢に入れられていた期間からすると、わずかな時間かもしれません。しかし回し者だという疑いを掛けられた彼らにすると、生きた心地がしなかったでしょう。
- ・ヨセフは兄たちに提案します。誰か一人を牢に留まらせて一番下の弟を連れてくるようにと。それを聞いた彼らは、ヨセフに対して犯した罪によってこの状況が生まれたと悟ります。そして「彼らの言葉」で言い合います。
- ・その言葉は、ヨセフの耳にも届いていました。彼らの嘆きの声が聞こえ、ヨセフは涙を流します。ヨセフと兄たちとの間にあった溝が、少しだけ埋まった瞬間でした。

(6月17日)「創世記41:37~57」

お前をわが官廷の責任者とする。わが国民は皆、お前の命に従うであろう。ただ王位にあるということだけで、わたしはお前の上に立つ。

(創世記41章40節)

- ・ファラオはヨセフが自分の夢を見事に解き明かしたのを知り、「このように神の霊が宿っている人はほかにあるだろうか」と感心します。そしてヨセフを、エジプト全土を治める者として扱います。
- ・わたしだったら8年目になって、「本当に大豊作のあとに飢饉が来たぞ」とようやく重い腰を上げ、ヨセフの話を信用しようとする。しかしファラオは当初からヨセフの言葉を完全に受け入れ、行動を起していきまふ。なかなか出来ることではありません。
- ・豊作の間に、ヨセフには2人の子どもが出来ます。イスラエル12部族の名前には、ヨセフは入っていません。ヨセフの息子であるマナセとエフライムがそれぞれ嗣業の地を受け継ぎます。ちなみにほかの兄弟の中で嗣業の地を与えられなかったのは、祭司職のレビです。

(6月18日)「創世記42:1~5」

イスラエルの息子たちは、他の人々に混じって穀物を買いに出かけた。カナン地方にも飢饉が襲っていたからである。

(創世記42章5節)

- ・飢饉は激しさを増していきまふ。ヤコブとその息子たちが住むカナンの地も、例外ではありませんでした。彼らは家畜も飼っていたので、飢饉の与える影響はたいそうひどかったことでしょう。
- ・そのような中、ヤコブの耳に「エジプトに行けば穀物がある」という噂が入ってきます。ヨセフはエジプトの穀物を管理していました。神さまが夢で知らせたとおりに必ず飢饉がやってくる、そのことを信じて貯えていました。
- ・ヤコブは息子たちにエジプトに行き、穀物を買うように命じます。ただしベニヤミンを除く10人で行くように言います。ベニヤミンはヨセフと同じ、ラケルによる子どもです。ヤコブはラケルを愛していました。だからベニヤミンを危険な目にあわせたくなかったのでしょう。

(6月11日)「創世記40:16~19」

三日たてば、ファラオがあなたの頭を上げて切り離し、あなたを木にかけまふ。そして、鳥があなたの肉をついばみます。

(創世記40章19節)

- ・料理役の長は給仕役の長が、「元の職に戻ることができる」とヨセフに言われているのを聞きました。彼はきっと大きな期待を抱きながら、ヨセフに自分が見た夢を説明したのではなかったのでしょうか。
- ・しかしヨセフの夢の解き明かしは、残酷なものでした。ファラオはきっとあなたを処刑するだろうと、ヨセフは伝えたのです。料理役の長はどのような気持ちで、ヨセフの言葉を聞いていたのでしょうか。
- ・三日後に処刑されることを直接伝えることは、正しいことだったのでしょうか。夢の解き明かしは神さまからのメッセージなので、それを伝えることは大事です。しかし死へのカウントダウンまで正直に話すヨセフには、何か冷たい印象を感じまふ。

(6月12日)「創世記40:20~23」

ところが、給仕役の長はヨセフのことを思い出さず、忘れてしまふ。

(創世記40章23節)

- ・ヨセフの夢の解き明かしは正しかったようです。給仕役の長は元の仕事に戻ることが出来ました。そして料理役の長は処刑されてしまいました。どちらもヨセフが言ったとおりの結果となりました。
- ・料理役の長を助けることはできなかったのだろうか、ファラオにそのような進言をすることはできなかったのだろうか。そのように考えてしまふが、聖書の興味はそこではありませんでした。
- ・「ヨセフが夢を解き明かすことができることを、給仕役の長が知った」ということが大事なのです。そしてこの出来事が、今後のヨセフ、そしてイスラエルの運命を左右することになります。ただし今回は、給仕役の長は自分のことで精一杯で、ヨセフのことは忘れてしまふ。



(6月13日)「創世記41:1~8」

そして、醜い、やせ細った雌牛が、つややかな、よく肥えた七頭の雌牛を食い尽くした。ファラオは、そこで目が覚めた。

(創世記41章4節)

・ヨセフが給仕役の長の夢を解き明かしてから、2年が経ちました。この2年の間、ヨセフは何を考えていたのでしょうか。給仕役の長はいつになったら自分を助けに来るのだろうか、そんな思いもあったかもしれません。

・神さまがそばにいてくださるという思いから、それでもいつかきっと牢を出ることができると思っていたかもしれません。そのような中、ファラオは不思議な夢を見ます。それも二度です。

・一つ目はやせ細った雌牛が、よく肥えた七頭の雌牛を食い尽くしたというもの。二つ目は実が入っていない干からびた七つの穂が、太って、実の入った七つの穂をのみ込んでしまったというものでした。エジプトの魔術師や賢者には、その意味がわかりませんでした。

(6月14日)「創世記41:9~16」

ヨセフはファラオに答えた。「わたしではありません。神がファラオの幸いについて告げられるのです。」

(創世記41章16節)

・給仕役の長はファラオのそばにいました。ファラオの動揺や憤りも、間近で見ていたのでしょう。また魔術師や賢者たちがひっきりなしにやって来ては、首をかしげながら帰っていく様子も、彼は見ていました。

・そのときに、給仕役の長は2年前の出来事をようやく思い出しました。自分が牢から出るときに、夢を解き明かしたヘブライ人の若者ヨセフがいたことを、思い出したのです。彼はそのときのことをファラオに申し出ました。

・ファラオはすぐに、ヨセフを連れて来させます。長い間牢にいたヨセフですが、ひげをそられ、服も着替えさせられて、ファラオの元に連れていかれます。ヨセフは、夢を解き明かすのは自分ではなく、神さまなのだと言います。

(6月15日)「創世記41:17~24」

そして、実の入っていないその穂が、よく実った七つの穂をのみ込んでしまった。わたしは魔術師たちに話したが、その意味を告げうる者は一人もいなかった。」

(創世記41章24節)

・ファラオは自分がどんな夢を見たのかを、ヨセフに話して聞かせます。もうすでに、何度も同じことを言っていたと思います。しかしそれでも、夢のことが気になって仕方がなかったようです。

・というのも、夢は神さまからのメッセージだと考えられていたからです。そのメッセージを正しく受け取り行動しなければ、とんでもない過ちを犯すこともあるのです。だからファラオは、囚人であったヘブライ人の若者ヨセフにも、夢の内容を懇切丁寧に語りました。

・わたしたちが見る夢は、その内容をすぐに忘れてしまうことが多いのですが、ファラオは詳しく鮮明に覚えていたようです。神さまからのメッセージだから、記憶の中にしっかりと残るのでしょうか。

(6月16日)「創世記41:25~36」

ヨセフはファラオに言った。「ファラオの夢は、どちらも同じ意味でございます。神がこれからなさろうとしていることを、ファラオにお告げになったのです。」

(創世記41章25節)

・ファラオの夢の内容を聞いていたヨセフは言いました。「ファラオの夢は一つです」と。神さまは夢を通して同じことをファラオに伝えようとしている。しかもそれは決定事項で、速やかに実行されようとしているというのです。

・その内容とは、今後7年間は大豊作が訪れるが、次の7年間に飢饉がやって来るというものでした。つまりこの先14年の出来事を預言したのです。(預言とは神さまからのメッセージを預かり、伝えることです)。

・さらにヨセフは、ファラオに対してどのような対策を打つのが望ましいか、進言しました。神さまからのメッセージを無駄にしないように、どうしていくべきかを伝えます。そして言います。「聡明で知恵のある人物を見つけ、エジプトの国を治めさせたらいい」と。